

中嶋 毅編

『新史料で読むロシア史』

山川出版社 二〇一三・三刊
A5 三三二頁 三六〇〇円

本書は、ソ連崩壊によって変容したロシア史研究の蓄積をふまえて、日本のロシア史研究者がどのような視角を用いて新たな歴史像を構築しているかを歴史に関心を持つ幅広い読者に提示している。本書は六部からなるが、紙幅の関係上、おもに前半三部の内容を紹介したい。

第一部は、ロシア帝政期を扱っている。田中良英「戦時体制から平時体制へ」は、近衛武官の軍人たちが皇帝に宛てた嘆願書が、政策決定の情報源として機能していたこと、十七世紀の集団嘆願と異なり、エリートが個別に皇帝の恩寵を求める様式を「君主との垂直的紐帯を重視する意識の変化」と指摘している。青島陽子「大改革とグラスノスチ」は、大改革期の教育改革の中で中等学校教員たちが、自己の利益を認識しつつ、職業倫理を向上させ、教育分野における公的な活動を推進していく姿を描き、大改革がロシア型の市民社会発生の契機となったと論じる。巽由樹子「帝政期ロシアの定期刊行物と科学、宗教、革命」は、科学雑誌と宗教雑誌を出版していたソイキン社に着目し、十九世紀末から二十世紀初頭のロシア出版事業における科学と宗教の関係性を明らかにしている。

第二部は、ロシア帝国末期の民族地域の諸問題を扱う二つの論文からなる。宇山智彦「セミパラチンスク州知事トロイニツキーとカザフ知識人弾圧」は、一州知事のカザフ民族統治のあり方を通じて、異民族に対する抑圧的な統治がかえって民族運動の成長を促すことになったパラドックスを、多様な史料を用いて描き出している。長縄宣博「ロシア・ムスリムがみた二十世紀初頭のオスマン帝国」は、これまで十分に利用されていないタタール語文献を新たな視点から読み直して、ロシアのムスリム知識人が民族という単位を重視する思想や前提とするロシア市民としての立ち位置を明らかにしている。

第三部は、二十世紀前半のロシア・ソ連期を扱っている。佐藤正則「二十世紀初頭ロシア・マルクス主義者の思考様式と世界観」は、プレハーノフとボグダーノフという二人のロシア・マルクス主義者の間で繰り広げられた論争を現在の研究状況の中でとらえ直し、両者が実は「一元論・唯物論・最新の自然科学を思考するという共通した価値観」を持っていたことを明らかにしている。池田嘉郎「敗北後のジノヴィエフ」は、コミンテルン議長として著名な共産党指導者ジノヴィエフが一九三三年に執筆し長らく未発表であった回想とメモの分析を通して、スターリンとの政治闘争に敗北したジノヴィエフのレーニン観を考察している。神長英輔「樺太の「ロシア人」」は、日本統治下の樺太で生きたロシア人やポーランド人たちの生活実態とその行動と交流の広域性を警戒した日本の当局が厳しい監視網を敷いた事を解明している。中嶋毅「ある亡命ロシア人の半生」は、在満白系ロシア人マトコフス

キーの生涯に焦点を当てることで、白系ロシア人社会の一側面をあぶりだし、常にソ連との関係の中で自らの位置を定めなければならなかった亡命者の苦悩を見て取ることができる。

本書は、ソ連時代に日の目を見ることのなかった新史料の利用、既存の史料を現在の問題意識から読み直す作業や新たな研究方法を駆使したを駆使した諸論文から構成されており、ロシア史研究の現在を広く伝えることを目指した良書である。(齋藤隆介)